

校一安
補郎藤

女四書

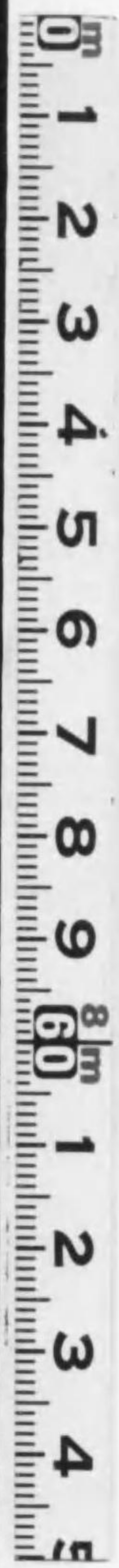
女孝經

上

4
2601

| | | | |
|-----------|---|---|----|
| 館籍書會育教本日大 | | | |
| 函 | 冊 | 架 | 函 |
| 一 | 九 | 一 | 二〇 |
| 身 | 號 | 架 | 函 |
| 一 | | | |
| 號 | | | |

東



始



4
2601



孝經



王德考子書
九年九月





玄宗皇帝
 永王璘の
 御前
 陳述

鄭氏の唐は朝散郎陳述ちんじゆといひし人乃妻あり
 才學の名高く當時の學者其門かどみ出るとの多
 かりきりしあどよ玄宗皇帝は皇子永王璘えいおうりんの
 夫人の鄭氏の姪ありられの其教育足らきし
 女徳ふ乏からんと成憂ひ古の聖賢と呼ばれし
 方々の女子の訓誨たつつき言行と集め女孝經
 十八篇を作り姪み贈り并せし帝み進り奉り
 れの獻感殊み斜あらきし廣く世乃婦女み示
 されしとあり

女 四 書
 女 孝 經
 氏 古 書 卷 十 一

女
四
書
卷
一
第
一
章

女孝經卷上目錄

- 開宗明義章第一
- 后妃章第二
- 夫人章第三
- 邦君章第四
- 庶人章第五
- 事舅姑章第六
- 三才章第七
- 孝治章第八
- 賢明章第九

女
四
書
卷
一
第
一
章

女孝經卷之下目錄

- 紀德行章第十
- 五形章第十一
- 廣要道章第十二
- 廣守信章第十三 附 衛靈王夫人之事
- 廣揚名章第十四
- 諫諍章第十五 附 班婕妤之事
- 胎教章第十六 附 楚樊姬之事
- 母儀章第十七 附 晉驪姬之事
- 孟母之事 附

○ 舉惡章第十八 附 晉南風之事

陳叔御妻之事

女孝經卷下目錄了

女孝經卷之上

開宗明義章第一

或時曹大家徒然々々閑居ひらひら々々ひらひら家うち小ちひ衆もろ庶ろくの若わかき女房達傍かたわら小侍坐まらきたり。曹大家此女房達このよ語りぬいひまりまりまるまるま昔堯かひと申奉まをりましま帝みかど小娥皇女英かみと云いふ所ところ小舜しんと云いふ人ひと何なにりまりまりま此舜このハ賤しんしまき農人のうじんの身み小くちひと云いふまれまとと聖人せいじんの徳備とくまより給たまひまたまるま故ゆゑ小堯王かひの二人ふたり乃御娘みむすめと舜しん小嫁合よめあひせ給たまひまぬまいまふまつまるま天子てんしも諸候しよこうも娘むすめ二人ふたり也なり海うみせまるま二人ふたりあまらまつま一

所へ嫁合せ給ふとも有り。是ハ一人の御娘ふ御
 子形く共次の御娘ふあり共御子られバ世嗣絶
 え給りぬ爲あり。されバ堯王も二人ありら舜よ
 嫁合せ給ふよ。此二人の御娘父の命ふ從ふゆ
 人の妻と成給つべ。きのふまを賤しかりし舜よ
 仕て少しも驕り給ふ事あく妻たる道と盡し
 舜を敬まひ給ひぬ。何きも此事を傳へ聞くれ
 るやと問ひ給つべ。庶の女房達對つて申られけ
 る。我々固より愚く形る身ふ侍まは未どは
 申うのよとも聞侍らばと申られぬ。そふよ

て曹大家語り給ふ。夫き賢くき人の勉め學び
 て萬の道理と考へ知り。若し辨ずつかさき事何
 き。幾回も人よ問ひ尋て心よ徹せば止ま
 ら。斯の如き女を遂ふ賢女とありて譽まを得
 るもの也。各も物語と能く聞入き心よ留めを慎
 ん行ひ給ふべし。先孝行の道娥皇女英の如く行
 ひぬれば。世の中よ何らゆは女見る人聞人の思
 はんへ。帝の御娘の姿ふ奢り給ふまは斯の
 如く親よ孝行ある御心すし。親の命を慎し
 給ひて。昨日まで賤なりし人あても。一度夫と定

まりてはうやほひ謙り事へ給ふらへる我等如
 きの賤しき身ふくひ猶々親よ孝行を盡し夫よ
 順ひ事ふらへと思ふ心出来べしやうの人あ
 まい又それを見習ふあどの女心根能く成る其
 道自ら廣まるゆり也惣て女の教み人と恭ふ
 む後あやまき位有べし過たふも諛へるも似足
 らはるも傲さるやうよ見ゆはゆのふれば兩か
 から禮ふ適りぞ又何事と恥せらるも輕々しく行
 ふづからば二度も三度も思案を廻らして道よ
 たらまはるやうよ心懸べし辛勞ある事よても

自ら於て履き事あらば人と兼頼むべし我
 身よ善なりともそれよ誇りて人と侮らるる
 ぞ只心形麗やうよ正しくして夫よ順ぐひ慈悲
 の心と先とて智恵と研き親よ孝行の志深く
 幼と憫みゆらぬものよ引立教あるやうよ
 まるる是き皆女の徳行成就する人あるやあ
 自ら天理よ適ひ榮え行との也尚書よ孝乎惟孝
 友于兄弟といふと孝行ある人の其徳を推及
 せして兄弟よ至るまで能親し睦敷とのあり
 といへば心成るべし



后妃章第二

毛詩の關雎麟趾の兩篇ハ、文王ハ后の太姒ハ共
 小聖人の御徳申しく、文王ハ外と治め給ひ、后
 ハ内と理め給ひ、天下國家其徳ハ化して治ま
 る御子孫榮へゆき給ひ、事と述たり、関雎の篇
 然心の周の文王聖徳備り給ひ、又后太姒ハ聖
 徳備り、夫婦とあり給ひ、譬へ、雎
 鳩といふ水鳥、水の上よ浮び、雌雄相并び、和
 鳴互ひ、狎き近くともあ、又遠かり隔り事ハ
 あき、如く、文王の夫婦の道協ひ給ひ、

述ぶたり。又麟趾の篇の意ハ、文王も后も同トク
 徳と修め給ひしよりて御子孫も悉く善人と
 あり繁昌したるひたふと成述へあり譬ハ麒麟
 とつゝ獸ハ青き草とも踏む生る虫とも踏む
 其生きつき仁厚あるもあよ其趾まざる斯の如
 く生と殺はぞ其如く文王も后も仁厚の御徳ま
 しむる也あよ御子孫武王成王も同トク至聖大
 賢あよ仁厚の御徳備せ給ひぬ文王の宮女たち
 初め思われしるあよあふるし太姒の如くあ
 り聖女ともとめ文王の后も備へしとまらりた

きとて此事と願ひ憂ひ悲しほるまきともはあぶ
 ら泣沈し身と破るあどあもあく其後願の如く
 太姒后も備たり給へとも只音楽絲竹あく樂む
 たりあを悦びよ溺きたる淫乱あり其後后の
 御心あを以りあの賢人を得文王も傳けま
 りらせ天下の政の御佐とありたきと朝夕願ひ
 給ひ天子も后も成徳明ららあはしりたあ故
 あり四海の民自ら善も遷りわがたり御代あ
 りたり毛詩白華の篇も鐘と宮も鼓と聲外も聞
 らしり音の謡ひ舞と内もあせむ其聲



外ト聞ク如ク后ノ宮中みク愛敬の御徳は一
 歩も文王ノ能事へ給フ天下ノ人悉ク聞カ
 之ノ后ノ御身ノ之レをおとしひク斯ノ如クあれ
 ば、況ニや下方ノのレをおとしひク皆ク其夫と愛
 敬シらズとシつテ心ヲ得ルべシ。

夫人章第三

夫人ト云ハ天下ノ國家ノ諸候ト呼ブ人ノ北方ノ
 の事也。是レ后ノ次ニ位高位高れバ必ズ驕ル
 りテのレあき常ニ誠ニとシ奢ルを省きテ儉約ノ道ヲ守
 るべシ。又我位より過テ私あり心ありのあり

其位を守り其わどく一行ひ萬私あきやり
 み公けあら心を持ち宮中の作法怠き見事聞
 く事み心と注て衆の女を導き少時も暇われバ
 毛詩尚書あどりの聖賢の書と讀み禮樂の道と辨
 まし行ふ處も賢女と呼ぶるべき才能も明く
 名の高く廣まり徳義の分際も過て位の高く
 る事も是き皆其身の幸も何らぞと反て禍と
 あらわれのあれば能々戒め謹しむる内も才能有
 て自ら名高く内も徳義有る自ら位も登る事何
 ら由ほしきと成るべし常々のたしあとい用所

あくく座し居る時ハ心と静らみめち形と
 重めくくし故何らバ萬の事み心と修け
 行ひ正しからん事と心づくべし斯の如く我身
 み禮義と修せ其家の人々見習ひく自よく
 り其家長久く予孫繁昌を家事疑ひあし
 是き皆夫人愛敬の徳よりゆきて所あり周易乾
 の卦の辞も邪を閑ぎ其誠と存せき徳博く
 化そといふ系も常みいふ辞と行ひあは事と
 だがをぬやうよ謹めば其身も過失邪もあらと
 あくく正しく直あら事ゆ有るより之と

見る人見做ひく自ら正しくある誠の道普く廣
くつゝ心なると。

邦君章第四

邦君と云は國の守の北の方此事ありむ。周
公と申奉りし聖人周禮といひ書を作り給ひて
萬の法度を定め置給ふ。其位々々應じく馬車
旌旗記號衣裳に至るゆへ夫々の異りあり。此御
教不從て我位の分よ非る衣裳の著るべりらば
常々の詞も正しき事のそとひて戲き猥り
かこしき事をいふべからば私ある事の我心よ

も其覺えつゝとのあきば我云ふ辞ハ私ある事
あつゝあどふ人の聞うんハ耻つゝと思ひ
つゝぬがとよあり我があは事ハ私あは事あつゝ
つゝあどふ人のあらんハ耻つゝと思ひくせぬ
がよ也我行ハ僻事あつゝあどふ人の傳つ
んハ耻つゝと思ひく行もぬがとき也。此三つ乃
事とたしあは上ハ夫ハ罪を得下ハ召仕と
のよ慕ふ故ハ斯の如き人の神明も自ら幸福
と與へ擁護し給ふものあり。是國の守の北の方
の孝行といふものなり。毛詩采芣の篇ふ于以て



繫つなを采と沼かみつみつ于こ以こ之こ用もち公こう候こうの事こととい
 つつも周しゅうの世よ乃な國こく大名だいめいの北きた北きた方かた文ぶん王わうと后こうと此
 徳とくみ化くわし神かみ明めいと敬かうひ夫おとこ婦めかけ共いっしょよ手て向むか草くさと取とり祭まつり
 禮らいとああ給たまひととや法はふららい乃な人ひと々々感あはれれ譽た
 詞ことば形かたちなり

庶人章第五

庶人しよじんといひふるる平人へいじんの事ことも其その平人へいじんの妻つまの行いひ
 の何事なにこともよよららぬ我身われみも利りははる事ことははれれば吾一人われひとり
 利りと得えべきべきよよららんと思おもははぬ義理ぎりと思おもひひと誰たれ
 も此利このりの悦よろこむむららんと思おもひひと人ひとも利りと得え

はせんと思ふべし。義理といふは禮讓の道と專
 らしむ。何事も人と先とて我身と後とを心
 りち也。平人乃妻の其身元より賤しなれば必
 利と貪り我儘ある心は、このあれば能々此理
 と辨へ知る人と凌ぐべからず。且常々舅姑と孝
 と盡し事り。暇あれば織縫ふ事と惰らぬ勤
 舅姑夫の衣裳と調へ侍るべし。毛詩瞻卬篇に婦
 公事無其蠶織と休と以る。女は世間の事と
 ばめとよりたぬものみ。織縫ふ為の心と心
 拭く。夫の衣裳と調へるべし。心あるべし。

事舅姑章第六

娘の舅姑ふ事つる乃道我が父母と愛し敬ふ
 少しも違ふ義と守り禮と盡し事へ奉るべ
 し。朝の鶏の鳴時分よ起て手と洗ひ口と漱ぎ夕
 着たる物と脱ぎ替へ舅姑の方へ行きて夏あらは
 涼しきやうふし。冬あらは暖くあるやうな衣
 めらせ。夕あは御寢ありゆめらせ。且その往省
 御用の事と承り萬ふ心と付く。是れ奉るべ
 し。心のうちよ敬ひ。或忘るべし。正直ありて義理と
 思ひ行跡と正る。禮義と専る。詐偽の少し。



應需 漢如畫

けりらげるやうふだゝあむべし。毛詩蝦蟇篇ふ女
 子行有兄弟父母ふ遠りとつゝ家も娘の子の嫁
 しく他人の家へゆくものあきば我父母兄弟と
 の遠ざかぬ故も舅姑を我親の如く思ひ孝行を
 あそぶべしとつゝ家心あるべし。

三才章第七

三才と云ひ天地人の三つふしく、人の行ひ天地
 の道理不違のげると述たる也。此段の心の衆
 庶の女房達右段々の物語を聞はるるも未の尊
 きとのあま、只今や女の夫も同ト人間あれ

バ。はちやを變りたる事の有まじきと思ひはから
ひたりふ。御物語りも驚き侍る事うねと申はれ
りき。曹大家曰ひたるは。夫の尊き事の各聞得
給ひたるよりも。はらり侍る也。古へより夫の天
不譬へたる物も。天を尊き物のあき故に。逾
勤情らば。夫は従ひ事つ。べし。物とて初
嫁り。其家と歸ると。小字と書て歸ると。其心
の女の親の家に住むべきとの。非ず。夫の家と
そ固より我が住むべき所あれば。其心と持て嫁
りたるを歸ると。其心侍るあり。古の語も。女

子の家は在り。則ち父天也。嫁ると。則ち夫天
也。といふ。と。女の親の家。在る時の親と天の
如く尊び。嫁ると。後。夫と天の如く。尊む。と。い
ふ。心也。天の陽。ふ。と。萬の物と。生。地。の陰。ふ。
て。天の生。る。萬の物と。育。て。養。ひ。て。天。は。従。ふ。
の。あ。き。が。天地の道理の如く。女。は。人。我。親。の家
に。在。る。時。の。親。を。尊。む。嫁。ると。後。の。夫。を。尊。む。是
を。皆。女。の。孝。行。の。道。也。此。故。に。天。道。の。清。く。明。く。ふ
る。よ。則。り。地。道。の。あ。か。し。利。は。る。ふ。基。き。親。と。愛
し。兄。を。敬。ひ。夫。を。尊。び。邪。あ。る。事。を。防。ぎ。正。し。き。禮

と行ひ先づ其家と能齊へ修りて其次に遍ねく
慈悲の心と人ふ及ぶぬまむ心あり人自ら見
あらしひ感て孝行慈悲の道は趣きと身とも修
さめ人とも治り侍るべき事有りて此とあらば
や又我身を行ふ徳義正しくれば心有人其行跡
と慕ひ又人と敬ひ謙る禮讓の道あれば心は
る人見習ひて人と争ふとありて又禮樂と
以て導き教められ心有人和き睦あり又譽む
べき事とが譽め憎むべき事とが憎む愛憎偏
頗あけまむ心あり人見習ひて惡事とあきん是

等の教何まも心よかけ謹し守り侍るべし毛
詩函民の篇ふ既不明且哲以て其身と保つて
へるもの物の道理と能く明くふ一萬ふ鋭き人お
れば必き其身と安く修め有ちて榮へゆき侍る
とみんる心ありて

孝治章第八

孝治とみふい孝行の道と以て家の内を能治り
上下共ふ其徳ふ化ははとと述たるもの也古の
文王の後の如き聖女の孝行の道と推して一門
九族と親し給ひ其外召使はる賤しき女と

至るも、憫を施し給ふものと。況し親類姉姪あつとせば、猶々憫愛し給ひ也。一門六親を悦ばし、やうに給ふ御行ひは、よよりて、其御心を以て舅姑の事へ向ふべし。心と盡し、孝行を極め、人より舅姑も悦び給ふべし。以上家と治むる人の犬鶏などの類ひも、侮ぬものある故に、朝夕召使の下婢あつと、輕しめ叱む事あり、恤と垂し恩を施まふべきもの也。如斯上下の悦むる行ひを以て、我夫の事まゝ、心の限と盡し、順ひ事

あり、よよりて夫も亦之と悦ぶ、この事あり。又家と能治むる人の朝夕側ふり、使ふ賤しきものも、誇らば憎まれ、やうに處る故に、そのそれより上の方の人も、猶々愛し、我蒙り親まも也。斯の如く人悦むる心と、以て親の事まゝ、親も嬉しく思われ、我子の正しき道を行ひ、人親まれ悦ぶ。わが災難も有らば、心安く思われ、親亡あり給ひ、後も此の如き子の弔ひ祭れば、親乃魂魄祭りと享け給ひ、必ず子孫の幸ひを護り給ふもの也。女の行ひ此理

りふ協ひ侍らば。一門親類下々ふ至るまで和ぎ
 親しみて。天の禍ひ來らば。人の咎め起らざらん。
 榮うへ行づき事疑ひぬ。是等の道の皆是れ古
 の賢女の孝道と以て上下と治め給ひ。教へ
 ぬ。志有る女承用守り侍るべし。毛詩假樂の
 篇ふ不愆不忘率由舊章と云はる。我行も愆も
 あく忘たふともぬ。何故あれば。古より聖賢
 の作りかき給ひたる訓への文と學び。其訓へよ
 忤もぬやうに率ひ用ふる故ありと云はる。心あ
 るべし。



賢明章第九

諸の女房達曹大家ふ問をれり。段々の御教
 女の夫ふ順ひ事らとのありと承り及ひ侍まに
 假令たとひ智惠ちゑにら女めも外かへ頭かぶさる夫の計は次
 第どに從まり理ふ侍まらるきくと問ひらる。曹大家
 答こたへ給たまひらる。人の悉しく天地陰陽の氣きと稟り
 け生なれたる物ものあれば女めも同おしく聰明賢哲
 の賢さき性せと生なまるつつもの也なり。はれども或あるは生
 き出いる時の氣質きしつの偏へんあり。或あるは成長せいじやうに從まひら
 人慾じんよくの私しに蔽かひ汚よらる其生なまるきくたる明ある

智慧ちゑも暗くらくあり行なるの也なり。如是かく穢けある成行せいぎやう心こ
 無念むねんに思おもひ正ただしき道みちと慕ほひ賢さき人の教しよと受う
 け勉つとめ勵む侍まらる鏡かみの曇かりて研ひきく元もとの如ごとく
 明あるが如ごとく生なまる所ところの智惠ちゑ頭かぶき善ぜん
 人とあり侍まらる古いにしへより女めも其智惠ちゑと頭かぶ
 りる家例けいれいにあきふ何なにらる語ことばり聞きけ參まらる
 昔むかし楚國しよこくの莊王しやうわう朝政てうせいに表あらわへ御出ごしゆ有ある日の暮くれ
 りる奥おくへ入いらせ給たまはる日ひ己みづかし暮くれる奥おくへ入い給たま
 へる樊姬はんきといひら宮女みやうにょ御前ごぜんに進まり出い申ま上あげる
 今日けふの御用ごようはらせらる日

の暮るゝ迄奥へひらせ給ふゆゑ、恐き多き事か
 から承給たりなく思ひ奉る也と申上られれば、王
 答く曰ひり、まは、はれがふそ今日表あく賢人
 ふ會ひ物語りゝゝ我心よ適ひ侍るゆゑ、日乃
 暮るゝゝ覺えざゝゝわくゝ有也と曰ひり
 せむ、樊姫重祢と申上り多き、其賢人の誰み侍
 るやらん、名を聞き侍るゝ思ひ侍ると申り
 ぶ、王又虞丘子と曰ひ賢人ありと曰ひり、わが、そ
 ろゝゝ樊姫口を蓋ひく笑ひり、きむ、王怪ゝ思
 ひ給ひり、虞丘子の隠き、けき賢人あり、何故ふ

斯の笑ひ侍ると仰るゝ、樊姫謹んゝ申上り
 り、勅諭の如く虞丘子の固より賢人と承たり及
 ひ侍きども、君ふ對し奉りゝ忠節ある事を未ど
 聞侍らば、其故ひり、あゝけき、妾幸ふ宮女の員
 ふ召加へらきて侍仕し奉る事十年あり也、其
 間連々ふ聞立見立てゝ、然るづき人からけり、女
 と九人まで出ゝゝやけり、つとあきゝめ侍る
 也、其九人の内自らより、遙み智慧優りたる女
 二人、妾と同等の女七人あり、此七人の女の並々
 の心榮ある人あれ、後々君の妾を寵愛し給

女孝經上 〇十七 凡古書 卒



あとと妬^かゑ、我寵愛^をと奪^ふまん^と巧^かまん^と兼^ふ々
 揣^か量^り侍^り々^れ共^に、それと思^ひひ^と、然^らず^ばめ^らん
 女^とも君^の事^らし^めけ^る、我^が私^ある^心ま^く
 公^の道^の非^び私^を以^て公^を蔽^おわ^道の非^びを
 我^が爲^す惡^しし^らん^と兼^ふ々^{あり}あ^らら^も君^の
 申^上、官^仕と^りけ^しめ^侍了^也、然^らず^ば彼^の眞^の丘^子ハ
 君^の宰^の相^とあ^る事^十年^{あり}、其^間進^む所^の人
 へ皆^一門^親類^の族^のと^ある、國^家の政^を輔^け
 朝^庭の惡^人と^も退^く厚^き賢^人と^進め^らし^めと
 と聞^侍ら^ば、斯^る眞^の丘^子と^君の賢^人と^曰ふ^と勅^す

女
書
上
〇十八
氏
古
書
屋
梓

誼とも覺え侍らぬとありと、申上々れば、莊王此
 事と有の儘ふ虞丘子ふ語り給へば、虞丘子深く
 樊姫を辞と感し、我愆り至極せりと思ひ、それど
 り我家を立退く、屋根もあつて荒なる家小住し、
 身の過ちを責め、ひらみり賢人を尋ね求め、
 君ふ出奉らんとむらり待ちどふ折しも其頃
 孫叔敖とひつる賢人逼塞し居られ、
 出、君ふ進め宰相の位とあり、
 優きたる賢人あれば、國の政を執り行ふよ、
 悉く正道ふ適ひ楚の國安く治まらん、
 隣國の諸候

楚の國を恐れ、撃んと思ふ心あかり、
 莊王遂ふ霸王とあり、威名を天下ふ輝く給ひ
 是れ、是れ偏ふ樊姫を一言の智慧と顯し、
 君と諫め奉り、故ふ非をや、毛詩ふ得人者昌へ、
 失人者亡とひつる、賢人を得らる君ハ其國昌へ、
 賢人を失つる君ハ亡おとひつる心あり、
 又辭の輯矣人之治矣とひつるも、
 辭をやひらり、美事を言出しぬ、
 聞き人其辭を能く聞容る、
 故ふ人を治むる道理ありとひつる心あり、

女
四
書
第
四
冊
第
四
冊
第
四
冊
第
四
冊

女
孝
經
卷
之
上
終

終

